（公財）中央果実協会
No.350

イスラエルの柑橘類事情（マンダリン、グレープフルーツほか）

米国農務省GAINレポート　2023年12月16日

これは米国農務省海外農業局のテルアビブ事務所（イスラエル）が作成した「柑橘類年次報告書」の一部を訳したものであり、米国政府の公式見解及びデータとは異なる場合があります。

要旨

イスラエルの2023/24販売年度（以下「年度」）の柑橘類の栽培面積は、2022/23年度と同じ1万6,200ヘクタールと予測される。収穫面積は1万5,850ヘクタールと推定されるが、収益性の低さと水不足が生産者の新植意欲を削いでいる。近年、柑橘類の生産者や輸出業者の主要課題は、気象条件、市場価格、及び物流であったが、今年度は物流と価格が主な課題であった。2022/23年度の出荷価格は、日本、中国、韓国向け等の一部の輸出先を除き、ほとんどの輸出先で下がった。シーズンを通して天候に恵まれたが、輸出上の課題により、収量の高さは国内市場を支えた。ウクライナで長引いているロシアによる戦争は、今シーズンの輸出に影響を与える追加要因となりそうである。イスラエルとハマスの紛争が柑橘類の生産と貿易に及ぼす影響について判断するのは時期尚早である。

概観

イスラエルの柑橘類の生産と需給に関する以下の市場分析は、2023年10月7日以前の数値に基づくものである。イスラエルとハマスの紛争の規模とイスラエルの柑橘類産業の需要と供給に及ぼす影響は、それらがこの危機の長さに左右されるため、判断するのは時期尚早である。さらに、ガザ周辺部と北部のレバノンとの国境地帯（柑橘類の園地が若干ある）や、紅海沿いの海上交易路の状況の変化にも注意が必要である。

当事務所が2023年10月7日以前に行った推計では、2023/24年度は生育期の天候に恵まれ、また栽培面積の減少がなかったため、柑橘類の生産量は平均的な45万7千トンと見込まれた。イスラエルの生産者は、極端な熱波や暴風雨、冬の降雨量の偏在、及び数週間にわたり高温で雨が降らない時期に直面するのが一般的であるが、2022/23年度は、シーズン序盤に猛暑に見舞われ、雨季は長くなり、降雨量も多かったものの、収穫量への影響はなかった。

イスラエルの2022/23年度の柑橘類生産量は、2022年に行なった当初予測の49万6千トンを6％上回った。生産者らの報告では、オレンジとタンジェリンの生産量が増加し、グレープフルーツとレモンの収量が減少した。当事務所は、オレンジとタンジェリンの2022/23年度の生産量予測を引き上げ、レモンとグレープフルーツの数値を引き下げた。

柑橘類産業はさらに、輸出と物流のいくつかの問題に直面している。

1. 輸出業者にとって海上冷蔵コンテナの手配が難しいか、全くできない（主に東アジアから）。
2. 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関連する数回の封鎖により、船舶の入港遅延（主に中国から）が続いた。（輸送が遅延し、高い滞船料が生じた。）
3. 日本、中国、韓国への海上輸送コストの高騰（他の目的地への海上輸送コストが下がったにもかかわらず依然として高水準）。これは輸出業者にとっても課題であり、輸出シーズン序盤には輸送コストの高騰と収益性の欠如から日本への出荷がキャンセルされた。

栽培面積

イスラエルでは、ネゲブ地方北部のベエルシェバより南の地区を除いて、どこでも柑橘類が生産されている。現在、柑橘類の27％がイスラエル北部で栽培され、34％が中部で、36％が南部（うち29％はガザ地区周辺）で栽培されている。残りは、国の東部国境に沿って栽培されている（図1参照）。当事務所は、2023/24年度の総栽培面積を1万6,200ヘクタールと推定しており、これは2022/23年度の総栽培面積と変わらない。

近年、イスラエルの生産者にとっての主な課題は、夏の長期化と冬の短縮であり、これは降雨量の大幅な減少を伴っている。生産者は、過去には稀であった冬季の灌漑も行わなければならなくなっている。すべて

の水利権は政府が所有しており、イスラエルの生産者は年の初めに水の割り当てを受け、それ以上の水の使用は禁じられている。そのため、灌漑作物用の農地は限られており、生産者は価値の高い換金作物か水の使用量が少ない作物を植えるよう動機付けられている。当事務所は、将来的には、イスラエルの柑橘類の栽培面積は減少し、ブドウ、オリーブ、イチジク（暑さに強く、水の使用量が少ない）に取って代わられると予想する。1970年の柑橘類の栽培面積は4万2千ヘクタールで、そのほとんどがオレンジであった。2022/23年度には、イスラエルの総耕地面積のわずか6%（1970年には38.5%）が柑橘類の園地であった。

図1　イスラエルの柑橘園の分布図

出典：イスラエル農業省、地理情報システム（GIS）、2023年

＜オレンジ＞　当事務所は、2023/24年度の生産量は平均的であるものの、2022/23年度を下回り、総栽培面積は3,500ヘクタールと予測する。コロナ禍による制限が緩和された後、ホテル・レストラン・食品産業（HRI）セクターが引き続き回復しているため、これらの産業セクターからの需要は高止まると予想される（紛争の影響を監視する必要がある）。国際市場価格が依然として魅力的ではなく、南欧・北アフリカ諸国との激しい競争に直面しているため、イスラエル産オレンジの大部分は、国内市場と国内加工業に仕向けられると見られる。当事務所は、2023/24年度のオレンジ生産量を8万トンと予測しており、これは今年度に比べて23%の減少となる。オレンジは現在、柑橘類の総面積の22%を占めている。

2022/23年度のオレンジ生産量は、2021/22年度の推計値を73%上回ったが、これは主に好天に恵まれ、落果が起きず、タイムリーな収穫が可能であったためである。当事務所は、2022/23年度の生産量を、2021/22年度の生産量より5%多い10万4千トンに上方修正する。更新された生産量は、業界が報告したデ

ータに基づいており、主に良好な気象条件の影響を反映している。EU市場（イスラエルにとって最大の輸出市場）でのオレンジの激しい競争と良好な国内価格により、当事務所は2022/23年度の国内消費量を上方修正し、輸出量を下方修正した。当事務所はまた、生産量の増加により加工用果実が増加したことから、加工仕向量を以前の推計値を27％上回る3万8千トンに上方修正した。

表　イスラエルのオレンジの生産需給統計

オレンジ（生鮮） 販売年度の始まり イスラエル	2021/2022 2021 年 10 月		2022/2023 2022 年 10 月		2023/2024 2023 年 10 月	
	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値
栽培面積（ヘクタール）	3,500	3,500	3,500	3,500	0	3,500
収穫面積（ヘクタール）	3,400	3,400	3,400	3,400	0	3,400
結果樹本数（千本）	0	0	0	0	0	0
未結果樹本数（千本）	0	0	0	0	0	0
合計果樹本数（千本）	0	0	0	0	0	0
生産量（千トン）	58	99	99	104	0	80
輸入量（千トン）	0	0	0	0	0	0
総供給量（千トン）	58	99	99	104	0	80
輸出量（千トン）	3	1	1	1	0	1
生鮮国内消費量（千トン）	27	55	55	65	0	40
加工仕向量（千トン）	28	43	43	38	0	39
総仕向量（千トン）	58	99	99	104	0	80

＜マンダリン/タンジェリン＞　当事務所は、これまでのところ生育期を通じて気象条件が良好なことから、2023/24年度のマンダリン及びタンジェリンの総生産量を16万トンと予測する。当事務所は、業界が報告したデータに基づき、2022/23年度のタンジェリンの推計生産量を上方修正し、2022/23年度のマンダリンとタンジェリンの合計生産量を、以前の予測を2万5千トン上回る19万5千トンに上方修正した。当事務所はさらに、2022/23年度の輸出量を増やし、加工仕向量を減らし、生鮮国内消費を42.5％増加させた。国内外の市場で需要が高く、価格が上昇したため、今年はタンジェリンの加工仕向量が少なくなった。輸出量は、海上輸送コストの低下と国際市場での良好な価格により増加した。さらに、国内市場で価格が上昇したため、生産者が生産量を増やすインセンティブとなった。

イスラエルでは、15品種以上のマンダリンとタンジェリンが栽培されている。しかし、イスラエルの生産者は、主に1つの品種 - オア/オリ品種に焦点を当てている。オア品種は、今シーズンの柑橘類の総輸出量の64％を占め、国内市場と輸出市場の両方で高い需要と高い価格を維持している。生産者がオア品種に切り替えているため、他のタンジェリン品種の栽培面積は減少している。現在、近い将来にオアに取って代わる可能性のある、より優れた特性を持つ新しい品種は普及していない。マンダリンとタンジェリンは現在、柑橘類の総栽培面積の41％を占めている。

表　イスラエルのタンジェリン/マンダリンの生産需給統計

タンジェリン/マンダリン（生鮮） 販売年度の始まり イスラエル	2021/2022 2021 年 10 月		2022/2023 2022 年 10 月		2023/2024 2023 年 10 月	
	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値
栽培面積（ヘクタール）	6,700	6,700	6,700	6,700	0	6,700
収穫面積（ヘクタール）	6,600	6,600	6,600	6,650	0	6,650
結果樹本数（千本）	0	0	0	0	0	0
未結果樹本数（千本）	0	0	0	0	0	0
合計果樹本数（千本）	0	0	0	0	0	0
生産量（千トン）	160	159	159	195	0	160
輸入量（千トン）	0	0	0	0	0	0
総供給量（千トン）	160	159	159	195	0	160
輸出量（千トン）	90	79	79	100	0	78
生鮮国内消費量（千トン）	40	56	56	57	0	58
加工仕向量（千トン）	30	24	24	38	0	24
総仕向量（千トン）	160	159	159	195	0	160

＜グレープフルーツ＞ 2023/24年度のグレープフルーツ生産量は、平均的な生産量で、前年比微減の15万トンと見込まれる。赤肉系を主体に、しかし白肉系も含めて、国際市場と国内市場の両方でグレープフルーツの需要が高まると予想される。以前は、需要が少ないため、生産者はグレープフルーツの植栽を減らしていた。しかし、ここ数年、アジアで、特に赤肉系グレープフルーツの市場が伸びている。日本、韓国、中国もここ数年、イスラエルからのグレープフルーツの輸入を増やしている。しかし、今シーズンは物流上の問題により、日本(原文のまま)への輸出がほとんどできなかった。これらのアジア市場は、競争が限られており、価格が有利なため、イスラエルはここに力を入れようとしている。

当事務所は、柑橘類生産者からの報告に沿って、2022/23年度のグレープフルーツの推計生産量を19万トンから15万5千トンに18.4%削減する。生産量の減少に伴い、2022/23年度の輸出量を8万トンから3万6千トンに引き下げる。当事務所は、加工仕向量を1万6千トン上方修正し、生鮮消費量を50%減らして1万5千トンとする。グレープフルーツ加工部門は、輸出コストがかからず、価格が良かったため、今年はより多くの果実を受け取った。また、今回の販売シーズンでは、特に中国の港湾における海上輸送の混乱により、アジア市場へのグレープフルーツの出荷が困難になった。

表 イスラエルのグレープフルーツの生産需給統計

グレープフルーツ(生鮮) 販売年度の始まり イスラエル	2021/2022 2021 年 10 月		2022/2023 2022 年 10 月		2023/2024 2023 年 10 月	
	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値
栽培面積(ヘクタール)	4,000	4,000	4,000	4,000	0	4,000
収穫面積(ヘクタール)	3,500	3,500	3,500	3,950	0	3,950
結果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
未結果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
合計果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
生産量(千トン)	130	175	175	155	0	150
輸入量(千トン)	0	0	0	0	0	0
総供給量(千トン)	130	175	175	155	0	150
輸出量(千トン)	63	62	62	44	0	40
生鮮国内消費量(千トン)	7	16	16	15	0	15
加工仕向量(千トン)	60	97	60	96	0	95
総仕向量(千トン)	130	0	175	155	0	150

＜レモン＞ 2023/24年度の生産量は、2022/23年度より2千トン少ない6万トンと予想される。2022/23年度は天候に恵まれたが、輸出需要や国内市場の需要が低迷した結果として収穫量が限られたためか、出荷量は予想を2千トン下回った。2022/23年度は、レモンの需要が低迷し、レモンの輸出がほぼ停止し、国内消費も減少した。当事務所は、2022/23年度の推計輸出量を3千トンからゼロに引き下げた。当事務所はまた、国内消費量の推定値を6万トンに引き下げた。さらに、加工業界からの需要も小さくなり、加工仕向量も4千トンから2千トンに下方修正した。

表 イスラエルのレモン/ライムの生産需給統計

レモン/ライム(生鮮) 販売年度の始まり イスラエル	2021/2022 2021 年 10 月		2022/2023 2022 年 10 月		2023/2024 2023 年 10 月	
	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値
栽培面積(ヘクタール)	2,000	2,000	2,000	2,000	0	2,000
収穫面積(ヘクタール)	1,850	1,850	1,850	1,850	0	1,850
結果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
未結果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
合計果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
生産量(千トン)	70	63	63	62	0	60
輸入量(千トン)	0	0	0	0	0	0
総供給量(千トン)	70	63	63	62	0	60
輸出量(千トン)	2	0	0	0	0	0
生鮮国内消費量(千トン)	63	60	60	60	0	58
加工仕向量(千トン)	5	3	3	2	0	2
総仕向量(千トン)	70	63	63	62	0	60

貿易　当事務所は、2023/24年度のイスラエルの柑橘類輸出量を11万9千トンと予測する（以下の表4で「その他」とされたニッチな品種は含まない）。これは、2022/23年度の輸出量から18.5%の減となる。輸出の減少は、地中海周辺の他の輸出国との激しい競争が予想されるためである。

表4　柑橘類の輸出量（千トン）

輸出	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22	2022/23	2023/24
オレンジ	7	4.5	4	3	2	4	1	1	1
グレープフルーツ	61	61	68	54	59	54	62	44	40
ソフト柑橘類	87	119	88	102	98	76	79	100	78
レモン/ライム	3	3	1	2	0	2	0	0	0
その他	該当なし	1.5	2	1.5	該当なし	2	2	1	1
合　計	**158**	**189**	**163**	**162.5**	**159**	**138**	**144**	**146**	**119**

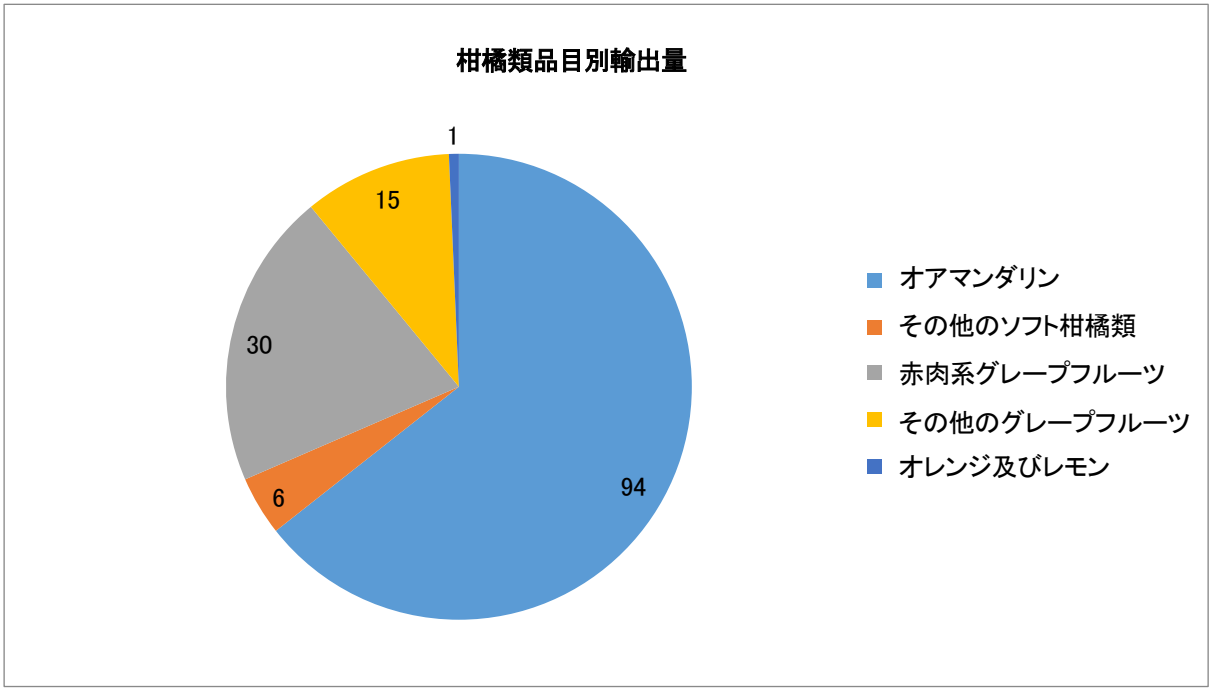
出典: イスラエル柑橘類委員会、中央統計局

イスラエルは、他国とほとんど競争しないで生産物を吸収できる新しい輸出市場を模索している。現在、競争相手がおらず、価格が良いため、主にアジア市場へのグレープフルーツの輸出を増やすことが目標である。イスラエルの農産物がモロッコ、トルコ、スペインなど他の輸出国との厳しい競争に直面しているヨーロッパ等のより近い市場と比較して、これらの市場では価格が高い。また、南半球の輸出シーズンの延長は、イスラエルの早生の柑橘類の収穫と競合する。

イスラエルの柑橘類業界は、中国、日本、韓国への出荷を拡大するとともに、オーストラリアやインドなどの他の市場へのアクセスも獲得することを目指している。現在、これら2つの市場は、衛生植物検疫上の問題により、イスラエル産柑橘類の輸出に門戸を閉ざしており、最近では、侵入害虫であるオナシアゲハ（*papilio demoleus*）のイスラエルでの検出が報告されている。しかし、この昆虫がイスラエルの柑橘類生産にどのような影響を与えるのか、また国際貿易に何らかの影響を与えるのかを予測するのは時期尚早である。

2022/23年度（訳注: 2023/24年度の誤り（表4参照）。なお、図1は2022/23年度の数値）のイスラエルの柑橘類輸出量は、赤肉のグレープフルーツ3万トンとオアマンダリン7万2千トンの2品種が、合わせて85%を占めている。（図1参照）

図1　品目別輸出量（千トン）　2022/23 年度



出典: イスラエル柑橘類委員会